

右は文化五辰年十月十三日左は文化二寅十月朔日、とある。時の庄屋はその跡が絶えたといわれる。

(話者 佐藤春雄)

古館の由来

《古館》

榊衝字古館は、ここに古い館があつたので、その名が付けられた。この館は、南北朝の頃、榊衝館と呼ばれて、館主は二階堂時藤入道道存であつた。岩瀬郡西部の中心地で、西方二一郷村を領したという。

南北朝時代に、ここは争奪の地で、結城親朝、仁木頼幸、伊賀盛光などの名が諸書に見られる。

戦国時代には、宮内太夫或いは宮内少輔行正とある。後に須賀川二階堂氏の家臣、塚原伊豫守が館主となつた。

館の北の土手に大きな五輪塔があるが、『白河風土記』では、塚原伊豫守の墓といっている。しかし、その形式から見れば、鎌倉時代のものといわれるので、二階堂道存の墓と思われる。水輪が失われているが、当地方では最大のものである。当時の堀跡の一部分が今も残っている。

古館堀跡



(「白河風土記」 「榊衝村誌考」より)